

弘法さん — 新茶屋 —

「おかげでさ、するりとなぬけたとさ」

と唄い、踊りながら、伊勢へ伊勢へと向かった、群衆のお陰まいり。

宝永二年（一七〇五年）にはその数四百万人ともいわれ、新茶屋の伊勢街道筋は、歩く人、かごで行く人で、それはそれは大へんな賑わいであつたそうです。

大正八年秋のことです。

どうした訳か弘法さんの首がポックリ落ちたのです。

村人たちはびっくりしました。これではいけないと、あわててつなぎ合せて祭っていたのですが、ちょっとさざると又落ちてくるような状態だったので、村人たちはどうしたものかと迷っていました。

「弘法さんは道端にあるし、じゃまやでこの際土の中に埋めてしまつたらどうやろ。」

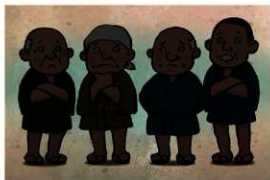
と言い出しました。

言われるように溝があり、道幅がせまいし、人の行き来が激しいので皆も黙つてうなづきました。

「そうや、土の中ならじゃまやないのう。」

と寺の住職にも供養してもらつて皆で埋めてしまいました。





ところがその夜、

「じゃまだ。」

と言った村の一人がポックリ死んでしまったのです。

まるで弘法さんのように正座してー。

そのあとを追うように、作業を手伝った村人が次ぎ次ぎに死んでしまいました。

さあ、村中は大さわぎ。

「弘法さんのタタリじゃ!」

と口ぐちに言いあいました。

ちょうどその時、あるおばあさんが眼をわずらって町の医者にかかっても治らないし大そう困っていました。

いく日かたった夜、不思議なことに、そのおばあさんの夢枕に弘法さんがあらわれて、

「私は暗くて何も見えない。元のところにもどしてほしい。」

とお告げがありました。

さっそくおばあさんは、このことを村人に話し、弘法さんを元にもどしてもらいました。

その後、おばあさんの眼は日毎^{ひごと}によくなり、弘法さんのタタリも消えて、もとの平和な村にもどったということです。
覆^{かぶ}堂の中には、石仏二体と目の石仏があり、願いごとがかなえられると、新しい*よだれかけ。を弘法さんにかけ、お礼まいりをするそうです。



伊勢街道沿いにある弘法さんの祠



キーワード：みんな、新茶屋、伊勢街道

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんな』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしょうしています。